第１１期東京都生涯学習審議会
第１０回全体会

会議録

令和３年２月１２日（金）
午後６時０１分から午後８時０１分まで
オンライン会議

○出席委員

笹井 宏益　会長

青山 鉄兵　委員

永島 宏子　委員

野口 晃菜　委員

林 幸克　委員

広石 拓司　委員

松山 亜紀　委員

山﨑 順子　委員

第１１期東京都生涯学習審議会　第１０回全体会
会議次第

１　開会

２　議事

（１）事例紹介

「ＮＰＯ等による青少年を対象とした取組に学ぶ③」

認定特定非営利活動法人育て上げネット理事長　工藤啓さん

（２）審議

３　その他

４　閉会

【配付資料】

資料　工藤啓さん発表資料「東京都における今後の青少年教育振興のあり方について」

第１１期東京都生涯学習審議会第１０回全体会

令和３年２月１２日（金）

開会：午後６時０１分

【生涯学習課長】　　ただいまから第１１期東京都生涯学習審議会第１０回全体会を開催させていただきます。

本日は、酒井副会長、土屋委員が欠席との御連絡を頂いております。また、松山委員は遅れて参加ということでございます。

まず、本日の資料を確認させていただきます。事務局から事前に次第と発表資料をお送りしておりますけれども、各委員の皆様におかれましてはお手元に御用意いただいておりますでしょうか。

また、本日の傍聴希望者については０名ということでございます。

それでは、ここからは笹井会長に議事進行をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【笹井会長】　　第８回から、ＮＰＯ法人等による青少年を対象とした取組に学ぶということで、その活動状況やいろいろなことをお話しいただいているのですけれども、本日は、認定特定非営利活動法人育て上げネットの理事長の工藤さんにお越しいただきました。資料に沿って工藤さんから御説明いただこうと思います。

それでは、自己紹介も兼ねてお話しいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

【工藤理事長】　　皆さん、こんばんは。育て上げネットの工藤です。

本日、資料に沿って、活動の内容と、今、青少年関係で考えていること、そして最後にこの審議会で青少年を対象とした教育施策について議論していただいているところの中でこういうことが子供たちのためにできたらいいのではないかということを少しまとめてお話をさせていただこうと思っています。

今日、特に観点としては広く就労や「働く」というところから青少年の施策を考えてお

話しさせていただこうと思っていまして、もう既に教育分野の方々のお話はあったと思いますので、比較的、将来「働く」ということから逆算をしたときに、今青少年に対してこういうことをしたらいいのではないかみたいなことを現場の視点からお話しさせていただこうと思っております。

こちら（５ページ）が自己紹介になります。会長から自己紹介と言われましたが、ＮＰＯ活動を始めて今１７期目に入っております。元々は東京の福生市生まれで、現在は立川におります。今は日本大学と東洋大学で前期と後期１コマずつ就労支援サービスやソーシャルビジネスの講座を持たせていただいておりまして、今年度は全部オンラインになったので、一度も大学のキャンパスに行くことなく学生たちとの関わりを終えたところになります。

まず、簡単に法人の紹介をさせていただきます。ビジョンやミッションというのはここ（７ページ）にあるとおりのものになっております。私たちの「若者と社会をつなぐ」というところに矢印のベクトルを入れているのですけれども、なかなか社会に参画できないような若者や子供たちを社会につなぐこともやっているのですが、社会のほうが子供たちにとって間違っている、または、うまくいっていないときがもちろんありますので、社会の側を若者や子供たちのほうにつないでいくような活動も大切にしていこうという意図を込めて矢印が入っております。そのため、このような審議会等もそうなのですけれども、行政のみならず様々な場面で、ルールや政策や制度等で若者のためにあまりならないというところは行政の皆さんの力を借りて一緒に変えたり、ＮＰＯで連携して少し変更を求めたり、そういうような活動も大切にしております。

事業は大きく四つやっておりまして、現在、特にコロナの影響が出てからは、基本的に対面とリモートを両方併せ持つようなことで活動しています。元々のメインは「就労支援」で、若者、特に１５歳から、今は４０代ぐらいまでが若者になりましたけれども、政策対象年齢が若者である限りその年代を支援していくところで、年間で新規に２，０００名ぐらいの若者たちが相談・登録で各プログラムに入ってきています。様々な若者たちの自立の形があるのですけれども、私たちの組織としては経済的な自立に重きを置きながら広く若者と社会をつなぐ活動をしています。

参考になるか分かりませんけれども、４月以降私たちも一気にリモートも含めた支援活動に入っていますが、４月から１２月まで約１，０００名の若者が登録に来られました。その中で、６割が対面だけ、残りの４割は、一部対面なのですけれども、リモートを中心

に参加されました。様々な活動の中で、就職した、仕事に就くことができた若者だけ見ていきますと、リモートと対面で差は全くありません。どちらであっても仕事に就く割合は変わらないという意味におきましては、リモートを推奨しているというより、若者や社会環境によって様々な状況にある方がリモートも対面も選べるほうが重要であり、どちらの効果が高い低いということはあまりないという印象があります。

特にリモートにしましたら、女性の割合がとても増えました。逆に言うと、対面だと、もしかしたら女性が来づらいこと、もしくは男性が来やすいことがあったのかもしれません。純粋にリモートにしてみた変化としては、女性の割合が、むしろ男女逆転するような割合で増えたというのは私たちも初めて知ったところになります。そこに関してなぜかというところまでヒアリングなどはかけていないのですけれども、対面・来所型に対してリモート型であると女性のほうの割合が増えるというところは参考値です。

この若者の就労支援をやっている間に教育事業との連携などもさせていただいていまして、特に御依頼を頂く高校は三部制、定時制、通信制、単位制のところが多いのですけれども、年間１００校ぐらいの高等学校と連携をして、キャリア教育、進路指導、通常学習の先生のサポート、中退予防、卒業後の進路の一つというようなことで活動させていただいています。同じくコロナの中でキャリア教育的なワークショップはなかなかできなかったのですけれども、こちらもオンライン化を進めることと、学校によりましてタブレットを持っている高等学校ですと、私たちの講師が行くことなく、いわゆるリモートでこれまでやっていたキャリア教育を今少しずつ始めることができるようになってきています。

この間、特筆すべきは、ある東京都の高等学校の例です。「就労支援」、職場体験の一環として、ゲームやアプリが出る前に、先にやってバグを見つけるという会社がありまして、その会社が、いわゆるバグチェック、デバッグと言われる業務があることをリモートで若者対象に講座をやりました。そのことについて、その高等学校でさらっと呼びかけたところ１３人の高校生が、「こんなアルバイトがあるのか」ということで高等学校から端末に入って、他の若者たちと同じ職場体験見学に放課後参加してくださったことがありました。実際に会社に行くほうが学びは大きいのですけれども、逆に職場体験ですと、特に高校生のためや若者のためと分けることなく、入れる人がそのときに入ったり、録画しておいたものを見ていただくことも一部可能かなというのがこの間の気付きにありました。

一概には言えませんが、そのような高等学校に進学される子供たちの一部は、大変な環境の子が少なからずいらっしゃいます。現在、小学生、中学生と高校生年代に対して、生

活と学習の支援を東京都の施策も含めて８０名ほどやっています。コロナ禍において、寄附を募りまして、パソコン、デバイスとＷｉ－Ｆｉの通信体制を確保しながら、必要に応じてお米なども含めて子供たちに届けております。後ほどの参考資料に入っているのですけれども、子供たちをあのとき集めることが全くできませんでしたので、リモートでつなぐことも大事なのですが、居場所的な機能は必ずしも対面をしている必要がないということで、ゲーム機器のオンラインを特別なルームをつくってつないで、そこに入りたい子――ＵＲＬを知らないと見れないところでＹｏｕＴｕｂｅ配信をして、それをただ見ている子、そこのチャットでおしゃべりをしている子、個別に相談をしたければ別のＴｅａｍｓやＷｅｂｅｘやＺｏｏｍみたいなものでつないでサポートという形で、いわゆるオンライン基盤上に、子供たちがいてもいなくても、話しても話さなくても、やってもやらなくてもいいようなことなどを少し実験的にやってみました。ゲームが必ずしも良いというわけではないのですが、少なくとも物理的な居場所を開けないから居場所ができないというよりは、代替的な形であってもオンライン上に居場所というのは一定程度つくれるのだということが少し分かってきたところがあります。

最後に、お子さんが少しつらいなという御家族の方の相談支援をしております。リモートならではということもありますし、最近では少しコロナの影響がありますけれども、海外に家族ごと行くことになり、お子さんがあちらの文化の中でなじめない。特に日本のコミュニティがあまり設定されていないような国や地域の御家族からの御相談がかなりオンラインで入ってくることがあります。お母さん、お父さんを含めて、相談相手がいないということでリモートで入ってくることも多々あります。おおむね若者と高校生年代、小・中・高の学校外の活動で御家族の支援を差し上げているのが基本的な私たちの事業活動というふうになっております。

今回、私は全ての青少年施策やターゲットは見えていませんので、皆様が御議論してくださった資料により、ターゲット・アプローチとユニバーサル・アプローチという言葉を拝見しました。内容を精査していくと、私たちの組織では、ハイリスク・アプローチとポピュレーション・アプローチという言葉を使っていたのですけれども、使い方はほとんど一緒なのだろうということで、１２ページでは、括弧を付けて、私たちの組織でハイリスク・アプローチと言っているところは恐らく皆さんの議論の中のターゲット・アプローチだろうと整理をしました。比較的、教育の中でも私たちは就業、「働く」など、逆算した活動をしていますので、あまり良い言葉ではないのですが、予防対策型というところ。将

来の未来を開いていくという意味では未来志向型の活動があると思っていますが、その中でも赤い枠のところは私たちの法人として比較的カバーしている領域で、かつ、今日の想定されているペルソナがこの辺の子たちだというところを少し図式化したものになります。その意味では、未来志向型のキャリア教育はほとんどやっていないことと、普遍的な子供たちに必要なところに対するアプローチもあまり私たちとしてはしていませんので、話の内容は、比較的ターゲットが絞られた子供たち、青少年の像をお話ししていると理解していただければと存じます。

現場で関わる子供や若者たちについて、本当に雑にまとめたものですけれども、一つは生きづらさがある。これも一言で言ってしまうと大きいのですけれども、単純に社会の不備によって生きづらい状態になっている人が多いこと。逆に言えば、私たちは障害を持っている方の支援はしていませんので、障害を持った若者や子供たちでなく、かつ、生きづらい方が対象となります。

二つ目に、後の取組にも関わってくるのですけれども、既存の環境だとそういった方々の才能や可能性が育まれづらいようなところにいる、一般的に言われる「普通」や「当たり前」のラインに乗らないような方々が大きな対象になっています。今日ここでは強く触れないのですけれども、委員でありますＬＩＴＡＬＩＣＯの野口晃菜さんらと一緒になって、少年院での活動も今４か所、在院中から中に入って支援をし、出院した後も支えていくような取組なども行っています。矯正教育を受けること自体は一般的な「普通」や「当たり前」の道ではないかもしれませんが、そういう子供たちや若者も対象に入っております。その上で居場所や「働く」ということを視野に入れていきますので、学校もしくは雇われるという、そこにいて当たり前、それが普通ということ以外の場所や支援方法を大切にしながら、家庭や地元・地域が機能してもしなくても、そこにある場所として、もしくはそこで受け止められる人間として、自分たちの組織の存在を大切にしているところであります。少し抽象的な話でしたが、このような活動領域でやっております。

本日、「就労支援」という立場でお話をしますけれども、今日使う「就労支援」の言葉だけ少し皆さんと共有させていただこうと思っています。「就労支援」というのは、青少年と若者の「就労支援」の歴史は４０年ぐらい前からありまして、基本的にそこで使われる文脈をまとめると、その人に合った「働く」を一緒に考え、実現に向けて伴走することだと言われています。その「就労支援」の範囲の中に就職支援というものが含意されています。その就職支援とはそもそも何かというと、雇われるための、採用されるための支援

ですので、就職支援というのは将来的に採用されたり雇われたりするための支援に収斂していくのは当然の話ですけれども、「就労支援」の範囲でいきますと、将来雇われるかどうかは本人の問題なので、雇われたければそれでいいですし、そうでない働き方を志向するならそれでもいいということで、選択肢を提示することを大切にした支援活動が正に「就労支援」だと考えております。ここでは社会保障上の安定性や企業側の働き方、雇用形態、採用形態は考慮せず今言及しておりますけれども、少なくともそれが将来就職に、雇われることにつながるかつながらないかということはあまり関係のない形でプログラムの設計をしているところであります。

少し細かくなりますけれども、「就労支援」と就職支援は違います。「就労支援」というのは、働く選択肢が多様であることを伝えること。それはフリーランスを礼賛するわけでもなく、正社員になることが良い、派遣が不安定だというところは、条件の違いは伝えますが、何が正しくて、何がその人にとって良いのかというのはそれぞれの価値観次第だと思っていますので、私たちからこれが良い悪いということはできる限り伝えないようにしています。できる限りというのは、知識の違いがありますので、ある程度本人の方向性に対して、「それであればこっちがいいんじゃないか」と言うことはあります。

二つ目に、多様な選択肢を獲得する機会を提供することを大切にしていますので、あくまでも選択肢、「働く」ための在り方のカードをたくさん持っていただいて、そのカードのどれとどれを使って自分の人生を短期、中期、長期でデザインするのかということが重要で、現状、課題意識としては、ほとんどの教育段階で青少年に伝えられている情報の多くは結果として就職支援からのバックキャストが多いのだろうという認識でおります。それが悪いというよりは、選択肢がそこしかないので、小学生、中学生ぐらいまでがいわゆる業務委託契約といいましょうか、将来プロ契約ですね。サッカーや野球選手であったのが、段々上に行くごとに雇われることに収斂されていくのは何らかの情報の隔たりがあるという認識の下で活動しています。若者個人の価値観を重要視しますというのはどの活動でも同じだと思いますが、その人にとって、現状での「働く」が将来の安定につながらなくても、その日が安定するのであれば現状はその「働く」を認めていく。ただ、将来の「働く」という部分をきちんと視野に入れた上で、今はこうしていくのがいいよねという話を大切にしています。

あくまでも選択肢を豊かにすることが目的であり、どのカードを切るかはその子供たちが決めることと考えております。

これ（１５ページ）は、少し見づらいかもしれませんけれども、ここに幻想的な絵がありまして、左上がメモ帳、左上の２番目がバッグ、下に行くとスマートフォンのカバーですね。実は私はスマートフォンのカバー、２台持っているのです。これは何かといいますと、私たちのところに来られる男子高校生がいらっしゃいます。たまたま現場の人間から私は話を聞いて、とても絵が上手な男子高校生がいるということでお会いしたのです。ポートフォリオを見せていただいて、うわっと二つの意味で思ったのです。こんな絵が描けるんだ、すごいなというのと、全く私の価値観にない絵だというのが感想です。そのとき、彼はバイトに、なかなか一歩が出ないということで、「どんなバイトを考えているの？」と話をしたら、ファストフードやコンビニエンスストアやファミリーレストランという高校生が想像する仕事を出してきまして、「へー」と聞いていたのですが、サービス産業で対面が苦手な人というのは必ずいますし、幾らバックエンドであっても人とのチームワークが必要なので、彼に合いそうな職場はどんなところだろうと考えました。

そこで彼が描いている絵の話が出てきました。趣味で作っているのですというのを見せていただいて、「これだったらこの絵を売ればいいじゃん」という話をしたら、「えっ」と。この絵をインターネット上に置いて、バッグやスマートフォンのカバーにこの絵を重ねて販売できるサイトがあるのです。私がスマートフォンのケースを彼の絵から選んだのですけれども、彼はこの絵をインターネット上にスマートフォンのケース用の絵として出すだけで、このカバーを彼は注文する必要はありません。私が彼の絵のカバーが欲しいとクリックすると、会社がこのカバーと彼の絵を合わせて発送する。商品が入ると幾ら自分に入るようにするかを設定し、彼の場合は１，０００円と設定をしたので、わたしが買ったことで彼に１，０００円入って、彼が１時間働くのと全く同じ効果を彼の絵が生み出した。

ここまでですとただのバザーですけれども、私がこれを買ったことをインターネット上に紹介したのですね。彼の名前は出していません。こんなすばらしい絵を描く人がいるよという話をしましたら、いろいろな人の目に止まりまして、私もこれを買いますみたいな話がＳＮＳ上で拡散しまして、彼の才能がたまたま広がったのです。

具体的に何が起こったかというと、別に彼はこれで生活していくという話ではなくて、彼はこれで幾ばくかのお金が入りました。「働く」ということと自分の好きな絵がつながり得ることの選択肢を持てました。今までですと、絵で何とか生活していきたいというような話を先生が聞くと、専門学校へ行ってイラストレーターになって、という話になるのかもしれません。しかし、彼は彼の好きな絵をそのまま商品としてネット上に上げること

ができたわけです。もちろん絵の道を歩んでも構わないのですけれども、少なくとも彼の才能や好きなことは否定されないまま「働く」ことの話ができる。彼は別にこれで働ける自信をすぐにつけたわけではないのでしょうし、それほどアルバイトに対する抵抗は元々なかったのかもしれませんが、アルバイトも始めました。この作品を何時間かけて描くか分かりませんが、１個売れるごとに１，０００円入るということは１時間働くことと同じです。逆に、５時間頑張ってアルバイトをした上でこれが知らない間に２個売れれば７，０００円入るようなことが彼にも体感できて、一生懸命働いたらお金も頂けるけれども、好きなことでもお金を頂けるかもしれないということを彼とやった事例としてお話しさせていただきました。

この手の話が一昨年ぐらいから現場ではごまんと出てきていまして、女の子だったらピアスを手で作るみたいなのがあって、それを違うフリマアプリで出してみたら翌日ソールドアウトする話など、コロナになってからアルバイトがなくなっても商品が売れるようになったというようなことを１０代の子が言っています。こうした活動をずっと最近しているのですが、これで生活していけると思って、これで頑張ろうという人は今のところ一人も出ていないことがすごく重要でして、週５回「働く」のは難しいけれども、３回のアルバイトと１か月頑張って３個売る。この二つを合わせて無理なく生きていく、そういう子供たちがたくさん出てきています。もちろんリスクはなるべく排除した上で、青少年のうちから、就職以外の選択肢を持たせてあげることが将来の生きやすさにもつながらないかというのが今日の一つのテーマになります。

後ほど触れますけれども、逆に、青少年もしくは子供たちや若者を支えていく中で、私自身が先ほどのようないろいろなお金の作り方が個人的には好きなものですから、職員は好きなのかなと思って社内アンケートを取りました。（１６ページ）左側にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄとありますけれども、例えば不用品をフリマアプリで販売する、自分で写真や音楽や描いた漫画を売ってみるなどですね。いろいろなことがある中で、いわゆる子供たちに関わる職員は関心があるかどうかと聞いたときに、７６名のアンケート回答ですけれども、７割ぐらいは関心がありますと。正直、法人職員に関心があるかどうかはどちらでも構わないのですけれども、今職員が関わっている若者にはこれらの仕事に興味がある若者がいるかという回答には８割が「いる」と答え、今関わっている若者にこういう仕事を紹介したいか、紹介できる自分になりたいかというところでも、８割近くがなりたい、紹介したいという回答がありました。

この場で言うのもなんですけれども、うちも公的な事業を受けていて、雇用保険を使っている以上仕方がないかもしれませんが、雇用保険を支払うような、働ける人をつくるという成果指標、ＫＰＩに対して、現場の人間や関わる人たちが必ずしもそうではないところにやや疲れている。それに対して、私たちは「就労支援」なので、両方選択肢を提示した上で御本人たちの道を伴走していくべきではないかと。

結果、やってみたところ、就業率は上がったのですけれども、それ以上に、提供した新しいお金の稼ぎ方、働き方で生活していく、頑張るという人はほとんどいないところが今の実情で、何かしら自分のやってきたことの承認である、評価である、そういう自信になることを必要としているのだなという印象です。

ちなみに、これ（１８ページ）は公開していないのですけれども、１３４人の若者たちにコロナの影響があった６月ぐらいにいろいろなヒアリング調査をしたのです。就職以外の働き方に関心があるかどうかというときに、６割が「やってみたい」。１割は「既にやっている」。更に４パーセントは「収入も得ている」という若者たちがいました。特にこの瞬間、人は外へ出られなくて就活がストップしてしまったのがあるかもしれませんけれども、ものづくり、ハンドメイド全般をやりたい、動画の編集をやってみたいというようなことが若者側の関心としてありました。

この間も事例としてすごく面白いと思っていますのは、「就労支援」のプログラムはオンライン化しているのですけれども、その中で動画制作ですね。ＹｏｕＴｕｂｅに上げるための動画の編集をしたい、勉強しておきたいという子たちが１０代に限らず２０代も増えていまして、勉強している途中から正社員になる若者もいます。この間コロナの影響がすごく大きいのだと思いますが、ものづくり、動画、アプリ制作、クラウドソーシングで完結できる仕事の受注の経験を持っている人たちは、中小企業にとっても今の社員が持っていないスキルとして位置付けられる可能性があるというふうに少し新しい動きとして見えてきたりします。これで生活していくというよりは、こういう能力を持った社員は、基本は趣味から入っていますので、スキルセットとして社員が持っているとしたらたまたまでしかなく、現在のように、動画をどんどん出していかなければいけないときに既存の社員に勉強させる余裕がない場合、この辺のスキルセットを持っている若者たちに関心を持たれる企業様もおります。

先々週、１０代の女の子が動画の編集を少し勉強していたのですが、４月か５月から社員に決まりまして、家から一切出なくていいので、家でやっていてくれればいいと。最近、

家から出なくてもリモートでフルタイムで働く若者の事例も出てきています。面白いと思ったのは、リモートワークで働いている若者に話を聞いたら、「会社に一回も行かなくてもいいので僕は働き続けられています」と言っていました。

ＩＴ系企業なので職種は限定されますけれども、これまでのように家から出ないといけない、もしくは人と関わらなければいけないのではなく、それは駄目でも別にそこが本質ではない企業も出てきたということです。人との触れ合いが苦手な人たちまで雇われるために、社会で生きていくために、無理に関わりの練習をするみたいな話は、今後本当に社会が変わっていくと、もしかすると、なくてもいいのかなというところはこの３、４か月でひしひしと感じています。

これまでの働き方、特に雇用、アルバイトは１か月間の精神の安定と体調管理ができないとシフトが組めなかったのですが、誰もが１か月間安定状態を保てるわけではない中で、今日この瞬間、あるいは３日間ぐらい安定しそうだなと思ったときにぱっと、何か自分ができる仕事が近くにないかというときに、はたから見れば時間の切り売りかもしれませんが、体調の安定しているときは働き、そうでないときは、「休む」のではなく、「働かない」ということをスマホ上でできるところが今あります。私たちのように、どちらかというと不安定な時期が断続的もしくは長期であるような子たちを、これまで「働く」にいざなおうと思うと、体調を管理しよう、安定させる。どちらかというと改善治療モデルになりがちだったのですが、こういうものをいろいろ探していく中で、「調子が良いときだけ働いたらいいんじゃないの」と言える。子供たちからすると言われること自体に、恐らくその人に合った「働く」の実現につながるヒントがあるのではないかと思っています。

どれもこれも十分安定して毎月定額が入るかといったら、入りません。ただ、十分安定で定額が入るために、朝起きる、１か月間は安定している、人との話ができるようにならなければいけない、報・連・相ができなければいけない、家から出なければいけないという、雇われる「なら・ねば」モデルと外れたところでできることがあることを体験する意味では、様々な働ける選択肢を、痛い目を見る前の早い段階からいろいろ知って試して、できれば安全な環境で試していくのはすごく重要なことだと思っています。

青少年教育振興に期待する点で、この審議会の資料などを読んで、こんなことができたらいいなというのは、これまでの話の焼き直しかもしれませんけれども、多様な働き方の選択肢を獲得できる機会を提供できる青少年教育振興であってほしいと思っています。いわゆる就職でもいいのですけれども、様々なチャレンジを青少年のときからしながら、自

分がまず安定・安心できる働き方はどういう働き方があるのかというのは、公教育の中でやるのはとても難しいことだと思いますので、いわゆる公教育外の教育の中でもできることがいいのではないかと思っています。

二つ目に、子供たちの才能や可能性を発信・創造するための十分な環境提供ということです。画像などをインターネット上にあげるには、良いカメラで撮ったほうがいいですし、ライトがあったほうがその子たちの作ったものがきれいに見えます。上げるときも、スマホよりはクリエーティブクラウドというＩｌｌｕｓｔｒａｔｏｒやＰｈｏｔｏｓｈｏｐで作ったほうがきれいに見えたりします。自分で持つには高いけれども、あそこに行ったら使えるなど、自分の才能をもう少しよく見せられるのだという機会・環境提供というのは、自宅に求めてしまうと家庭の経済力が見事に出てしまうものですので、私は、稼ぐというよりは創造・発信を安全な場所でやるという意味で既存の施設などにそういう場所ができたらいいと思っています。

子供たちが、危ないところや、「いいね！」がたまるような映像を撮るよりは、造った場所を自由に使ってもらって、安全にやってほしいと思っています。そういう環境がないと、「いいね！」がつきやすい危ない場所や人が驚く場所に行かなければいけない。場合によってはそういうことをあえて提供するようなところに巻き込まれていく可能性がありますので、例えば今の施設の中で集まることが難しいのであれば、自由に創造・発信ができる環境をそういう場所に造られたらいいと思っています。

青少年施設へ私もたまに行くのですが、施設の食堂などに企業が入っていますが、あれ自体を高校生のアルバイトにして一部開放するというようなこともいいかなと思っています。ワークサンプルという言葉があるのですけれども、擬似的な仕事の体験をしておくと、将来に対して非常にリアルに働くことや働いている自分の姿が見えるように思います。青少年施設における青少年がお金の払い手という消費者になるのではなくて、自分たちがレストランのアルバイトでも受付でもいいのですけれども、「働く」を試せる場所になることはとても重要だと思います。一般の企業でアルバイトもいいのですけれども、そうした場でのアルバイトの仕事は基本的に創造性に乏しいというか、マニュアルどおりやるべきことをやることになりますので、そうでない、でも稼げる、最低賃金を頂けるような場所としてのワークサンプル機能をそういう施設に一部でいいのであるといいと思っています。

それに付随して、そういう青少年施設で一部、「働く」や稼ぐという経験を手にできる。一部で構わないので、そこに入る事業者さんには、そこの利用者を一時的に雇用する、２

週間ずつ誰かを雇うなど、社会機能も担っていただくといいのではないかと思います。

また、サマーキャンプ、家族旅行をしたことがない子が多いので、どこかへ連れていってあげたいと思って寄附を集めてやっていたのです。一番良かったのは、子供たちに寄附を頂いたから、このメンバー全員が合意する場所に好きな乗り物に乗って旅行する計画を立ててくださいということをやりました。決められた場所に行くのではなくて、自分たちが行く行程、旅程、内容、食べるものを企画するのは、本当に良い経験になったと思いました。家から出たことがない、新幹線に初めて乗った、東京の多摩地域を出たことがないなど、当たり前だと思っていたことを体験していない子たちがいる中で、東京であれば、島が一番良いのではないかと思っています。特に、島に行くということと島から来てもらうことも含めて、更に島のものをこちらで売ってみるなども含めて、ここではないどこかで何かを実現できるようなトリップ機能みたいなものが教育振興施設との連携の中でできないかと少し思っています。

最後は、やはり逃げ場と駆け込み寺が本当に必要で、今日守ってあげないと家に帰れないこの子はどうするのだというときに、宿泊棟などを持たれているところの一部を駆け込み寺機能として持っておくような教育振興施設が必要だと思います。特に逃げることが瞬間的に必要であったり、泊めてあげるところで何とか生き延びている子供たちがいますので、生き延びられる社会的機能として宿泊機能を持っている施設の何部屋かは常にそういう子供たちのために確保していくような施策。そこを使えるＮＰＯなりなんなりは限定しておいていいと思うのですけれども、そういう逃げ場を期待したいと考えているところでございます。

ここ（２２ページ）から下は参考として、この間、私たちのほうでこれまで対面でやっていたことをオンラインにしてみたときの状況や実情をまとめたものを添付として張らせていただきました。こちらは公開している資料です。少し就労寄りの話になってしまったのですけれども、高校生以上の子供たちはもはやアルバイトをしないといけない子たちもたくさんいますので、青少年の教育振興施設の一部は「働く」というところをしっかりと打ち出していくような場所であっていただきたいと思っています。

私からは以上です。ありがとうございます。

【笹井会長】　工藤さん、どうもありがとうございました。

ここから皆さん方に質疑、質問などを頂いて、また御意見も頂きたいのですけれども、最初に今の御説明について御質問というか、もう少しここを詳しく聞きたいのだけどみた

いなのがありましたらお願いしたいと思います。

【青山委員】　　青山と申します。今日はありがとうございました。聞き漏らしていたら大変恐縮なのですけれども、最後に青少年教育振興に期待する観点というスライドの中で、１点目に多様な働き方の選択肢を獲得できる機会提供というところがあったかと思います。青少年教育といっても、「教育」を狭い意味で捉える必要はないと思いますが、どういった形で機会を提供するか、あるいは若者の側からすれば、どういうサービスがあれば選択肢が獲得できるかというところをもう少し具体的に教えていただけるとありがたいと思っておりまして、よろしいでしょうか。

【工藤理事長】　　ありがとうございます。

様々なできることがあると思いますけれども、一番安全にできると思うのは、例えばメルカリさんなどはメルカリの使い方みたいなのを高齢者向けに自治体と連携してやっています。何が危なくて、何が良いところで、あの中で使われる通貨の話などを高齢者が分からないので、安全に使っていただくコンテンツなどを持っています。そういうプラットフォーム側も責任を持って使えるという意味で、私が勝手に「これ、いいよ」と言うよりは、メルカリを使うにはこういうふうに使ってねということ。どちらかというとプラットフォーム側の事業者と連携しながら、使い方や、売る側になる場合はどういう観点が必要か、絶対気を付けなければいけないことはこれだといういろいろなトラブルの事例なども話してもらえるといいと思います。事業者側と連携して、リモートなど、その場所に来られない子供も参加できるような形で、ワークショップを開いたりするのはいいかなと思っています。

【青山委員】　　ありがとうございます。

【永島委員】　　永島です。工藤さん、ありがとうございました。

すごく良い活動というか、すばらしい活動で、就労支援が根本的にどういうことを目指すかということを改めて知る機会になったのですけれども、勉強不足で申し訳ないのですが、すごく気になっているのは、どういうふうにこのＮＰＯはマネタイズされているのか。継続的に活動を続けるためにどんな感じでやっているのか知りたかったのですけれども。

【工藤理事長】　　うちは比較的行政連携も多いので、６割がいわゆる公共調達ですね。コンペで勝ち負けがあるタイプのものが６割で、２５パーセントぐらいは個人と企業からの寄附です。残りの１５パーセントは学校を含む応能負担というか、費用が払える個人や組織に対してサービスを提供するような割合でやってきています。

【永島委員】　　企業からの資金というのはないですか。例えばさっきワークサンプルとおっしゃっていたと思うのですけれども、体験型というか、そういうことで企業からというのは何か今のところないのですか。

【工藤理事長】　　今のところ就労支援で御寄附などを頂いて御支援をさせていただいているので、企業側とのＢtoＢでの仕事というのはそんなに多くはないです。

ただ、教育で言うと、学校に教育サービスを行う企業などもあり、その企業の提供コンテンツの中にうちのコンテンツを入れていただいて、学校がそれをやりたいのだということであれば、私たちが学校に行って、その対価は企業から頂くようなのがＢtoＢのモデルかなと思います。

【永島委員】　　コンテンツ費用ということですね。

【工藤理事長】　　そうですね。お品書きのうちの１個にノミネートしておくようなイメージであります。

【永島委員】　　分かりました。ありがとうございます。

【松山委員】　　松山です。工藤さん、こんにちは。今日はどうもありがとうございました。育て上げネットさんの活動は前から存じ上げてはいたのですけれども、改めて久しぶりにお伺いして、やはりこのところのコロナの影響もあったり、いろいろなツールや働き方の選択肢がすごく増えている中で、皆さんの寄り添い方なども結構変わってきたりしているのかなと感じるとともにいろいろな可能性を感じて、大変興味深く拝聴しました。

お伺いしたかったのは、就労支援される中で、特に今年リモートで結構されていて、対面とで実際に効果はそんなに変わらない。また、新しい方たち、女性が増えた、海外からなど新しい可能性もあることをお話しされていたと思うのですけれども、オンラインであったり、新しいクラウドワークスなどという働き方が出てくる中で、支援者側のスキルだったり働きかけ方は今までの対面と何か変わってくるものなのか。それとも本質的にあまり変わらないのか。あと、新しい働き方が出てきて、「就労支援」の在り方など、職業と就職ではなくて、「働き方」についての捉え方が変わってくる中で、新しいプレーヤーとしてもっといろいろな人が関わらなければいけない、という、何か変化みたいなものをお感じになったり、思っていらっしゃったりすることはありますか。

【工藤理事長】　　一つは、いわゆる子供や若者たちに寄り添う人間の変化がこれからあるとすれば、取りあえず去年に関しては、今まで対面でやっていたものをオンラインに置き換えるところで精いっぱいだったと思うのですけれども、本質的にはオンライン基盤上

に対面とリモートをしっかりと構築するという新しい作業が必要だと思っています。

以前、リモートで履歴書の作成支援を受けたという女性から伺った話ですけれども、履歴書の添削をリモートでしてもらっているとき、自分がしゃべっていることをチャット上でまとめてくださって、それを後で見返しながら一緒に履歴書を作ったことがあったそうで、それがとても有難かったということでした。彼女がとにかくいろいろしゃべった生育歴を聞きながら、まとめながらチャットに打ち込んでいく。それがログとして残り、更に映像としてそれを見返せるように録画してくれていて、履歴書をオンライン上で一緒に作ったというのは、チャット機能という新たなものをこの人のためにしっかりと作り出したという意味で、リモートでやる援助職が、対面の代替ではなく、オンラインの特性を生かした新たな価値提供をできたのではないかと思いました。その意味では、そういう観点を持った人間はこれから必要になっていくだろうと思います。

新しいプレーヤーに関して言いますと、特にリモートを含めて言うと、やはり公的な機関からいろいろな相談を受ける中で、私たち自身がよく発信しているのは、「相談支援がしたければ、まずは公的な機関に相談をしたほうがいいですよ」と民間団体として言っています。民間団体はどれが良いとか悪いとか言えないけれども、公的な機関の人は絶対その人をだますことがありません。結果としてだますこともありません。日本ですと公的な機関や方々の信頼度は民間のＮＰＯに比べると抜群に高いわけなので、これまでですと、もしかすると行政はお金の出し手、ＮＰＯは受け手という構造が、行政は信頼の担保となって、ＮＰＯはしっかり実施する。特にリモートになると施設が見えないので、本当に信頼できるかどうか、こちらも相手も分からないですよね。その意味で、プレーヤーとしては公的な機関の人たちがお金ではない部分で関わってくださることが一つ。

もう一つは、オンライン基盤が前提となっていく中で、特に対人業務の場所に集う人たちはその理論と実践が対面でした。そのため、いきなりオンラインで支援をといっても簡単ではありません。新たなプレーヤーとしては、対人職に興味はないけれども、システムなりデバイスをつないだり、先ほどのゲームをオンラインで作ってＹｏｕＴｕｂｅで配信したら居場所ができるのではないかという発想は、それをやっている人間しかできないです。私は、そういう子供たちも含めて、彼らの当たり前を支援という場に実装できるには、対人支援ではない分野からもう少し企業さんと連携をしないとそんな発想が出ないというところはこの間すごく強く思っているところになります。

【松山委員】　非常に参考になります。ありがとうございます。

【笹井会長】　今の質問の関連なのですけれども、技術革新というのは、人間の手作りというか、肉体労働を代替してきたわけです。それが今は技術革新をバックに持ったサービス業として展開しているわけです。でも、例えばＩＣＴならＩＣＴが苦手な子もいるわけです。先ほど言った対人的なサービス業に興味がある。そういう子は、東京の就業構造は８割が第三次産業で、サービス業のそういった仕事はかなりあるとは思うのですけれども、そうではなくて、肉体労働と言うと変ですが、手作り労働みたいなのがすごく好きで、あるいは対人のコミュニケーションがすごく好きでという子に対して、どういうアプローチをしているのかしていないのか、教えていただければと思います。

【工藤理事長】　元々、特にコロナの前までは、サービス業、対人業を苦手、そこでは生きていけないと思っている人たちへの支援が圧倒的に多かったことがありまして、第一次産業系の話とＩＴを使う企業との連携に注力していました。そこにコロナが来て、ＩＴ関係の仕事、リモートワークの練習であったりトレーニングをできるようにしたのです。一方で、これだけ外に出られなくなりますと、これまで私たちのプログラムで最も不人気であった体を動かすトレーニングを希望する人が一気に増えました。理由は分からないのですけれども、暑い日、寒い日に農家のお手伝いはつらいと言っていた若者が、農家のお手伝いは安全で、体が動かせて、離れていればみんなとしゃべれるということで、すごくニーズがありました。彼らにも今人数を絞っていますので、１人が来ていいのは週１回か２回しか来られない。申し訳ないけれども、それ以外はリモートでやろうと。

しようがなくこれだけリモートをやらされて、結果、絶対自分はリモートの仕事には行かないというふうに自分自身で決められた若者は、よしあしというよりは、自分からリモートではない職場で働くのだという形で絞り込みが進んだと思います。そういう仕事の待遇が上がると彼らも継続と安定が結び付いてくるかなとは思うのです。そういう意味で、振り分けがはっきりしてきたので、進むべき方向を自分で選ぶか、自分で片方を閉ざすかで、残った道がはっきりしているような状態が現在地かなという認識でいます。

【笹井会長】　ありがとうございました。その関連で、例えばユーチューバーというのはなりたい職業で今すごく人気がありますね。ユーチューバーになりたいといった子がいたときに、どういう就職あるいは支援をされるのですか。

【工藤理事長】　実はどこかで同じ質問を受けたのですけれども、高校生ぐらいになるともはやユーチューバーになりたいという学生はあまりいない印象です。二つ理由はありまして、もう既にユーチューバーは飽和状態だということを知っているのと、あと、面白

いことをやる人間の動画を編集する側に回りたいというのです。つまり、自分たちで動画編集する子がいたりするのですけれども、結局、どんなに面白い子たちもＹｏｕＴｕｂｅならＹｏｕＴｕｂｅに最適化した動画の編集と、もう一つ、技術者、マーケッター側に回りたい。ユーチューバーを育てるというか、作る側の人間です。本当に面白い子などはユーチューバーのほうをやりたいのでしょうけれども、多くの場合、高校生ぐらいになると大体そちらでないことが分かってきたときに、自分が生かされるところはもしかしたら動画を編集する側や、面白いことをやった子たちをより面白く見せる方かなと考えるのだと思います。この辺は、大人が考えるより彼らのほうが自分の生かし方が何となく見えています。これは統計でなく、現場の雑感です。

【笹井会長】　ありがとうございました。ほかにどうでしょう。御質問などありましたら、どなたでも結構ですのでよろしくお願いします。

【広石委員】　工藤さん、どうもありがとうございました。すごく共感する話が多かったですけれども、今の笹井会長の話も含めてですが、今日、工藤さんが一番おっしゃりたかったのは、就労という分野がデジタルトランスフォームしているので、例えばさっきのＯｔｓｕｋａｉなども、昔は価値にならなかったようなことが価値になる時代になってきているということだと思うのです。そういった意味でも、逆に「就労支援」やいろいろなことの支援をどうデジタルトランスフォームしていくのかというあたりを工藤さんが一番提起されたかったことではないかと感じました。

ですから、ユーチューバーに育てるという概念自体は少し違うのかもしれません。さきほどの高校生の事例の話があって、絵を売るのだけれども、それで生活していこうとはあまり思わない。別にマクドナルドのバイトなどで収入を得てもいいのだけれども、絵を売ることができるのだったらそれでいいのではないかという感じ。私が思ったのは、自分の中にあるものを見直して自己肯定感を高める。例えば社会環境というか、いろいろなネット環境などを使いこなせば新しい生きていく道があるよということの気付きを工藤さんたちは提供しているのだなと思いました。ですから、先程、就職支援と「就労支援」は違うと工藤さんがおっしゃったのはすごく重要なキーワードだと思います。果たしてユースワークで提供すべきもののゴールはどこにあるのかというと、いい就職先を目指すことよりは、もう少し自己肯定感を持てるようになる機会をつくる、逃げ場をつくってあげるなど、社会環境が使いこなせるということなのかもしれない。その辺が今日とても示唆があるなと感じていました。

今チャットで送りますけれども、フリマアプリで収入を得ている子は１０代で２９パーセントいて、１０代でフリマアプリで出店する側に回りたいという子が５５パーセントぐらいいる。そういったところで言うと、この子たちは別にフリマで生活していこうとは思っていないのだけれども、そういう体験が普通に社会環境の中にあってというあたりを実は我々が見落としがちなのではないか。工藤さんはリアルな１０代の方などにずっと接してこられているので、こういったことを肌感覚で感じていらっしゃるということかなと。今日はとても私は共感することも多かったし、すごく勉強になりました。

【笹井会長】　ありがとうございました。

それでは、ここからは質問以外、御意見などをおっしゃっていただきたいと思います。これまでの質問でもありましたけれども、工藤さんがやっている活動に関連して、要するにターゲット・アプローチでいろいろな活動をされていると思いますが、そのことに関する、大きく分けてそういう事柄と、それを行政というか、公的セクターがどういうふうにプロモーション、プロモートしていくのか、支援していくのか、奨励していくのかという大きな問題があります。どちらでも結構ですので、コメントなり御質問なり頂きたいと思います。よろしくお願いします。

【林委員】　今日は、お話、どうもありがとうございました。

質問になるのかもしれないですけれども、工藤さんがいろいろ支援されていく中で、いろいろな子供、青少年と関わっていると思うのです。その中で、「やってみたい」と「できる」というのは必ずしもイコールではないと思います。そのときに、諦める練習というのですか、自分がやりたいと思っていることが必ずしもマッチングしないケースもある。自分の経験で恐縮なのですけれども、学生が教員になるところを指導するときに、特に私立の学校などだと、学生で非常に優秀、ハイスペックな子が幾ら出しても書類で落ちたり、面接まで行っても面接で落ちたり。その一方で、教員になって大丈夫なのかなという学生がすっと就職が決まっていったりして、お見合い的な要素もあると思うのです。ハイスペックの子が必ずしも必要とされるとは限らない。そのときに、できる子ほど諦める練習が必要かなと思うのです。「就労支援」になるのかな。支援する側も持続可能な「就労支援」を続けようと思うと、諦める、折り合いをつけるところに非常に現実問題として直面するところだと思いますけれども、全部バラ色の世界ではないよというところを伝える必要性、その支援について今までどういう経験をされてきたのか。可能な範囲で教えていただきたいところが一つ。

もう１個あるのですけれども、これは工藤さんがいろいろなところで聞いているところかもしれないですが、資格の壁というのですか。この資格がないとできないという仕事もやはりあると思うのですね。今日お話の中で「働く」を試せるワークサンプル機能とありましたが、やりたいけれども、その仕事をするにはこの資格がないとできない。また、さっきの諦めるというところにもつながるかもしれないですけれども、実際に何ができるというのと資格を持っているところと別物かもしれないですが、資格の壁のあたりで感じられている部分を教えていただけるとうれしいなと思いますので、よろしくお願いします。

【工藤理事長】　　ありがとうございます。

恐らく言い方に語弊があるかもしれませんけれども、私たちのところに来る方というのは何かをいったん諦めた経験があり、そこから改めてやっていこうとされる若者が来ている気がします。例えば、新卒採用で頑張ろうと思ったけれどもうまくいかず、民間企業へ向かおうと思ったけれども採用されず、ハローワークに行っても駄目で、何か育て上げネットみたいなのがあるよという話です。私どもの場合、底つき体験と言うのですけれども、私どものところに来た時点で底つき体験をされているので、心身の状態がよいと前向きだったりするのです。改めてチャレンジを応援する部分ももちろんありますが、では、どうしようか。林委員のお聞きになったことの次ぐらいのところから始まっている可能性はありますので、本当に大変な方は私どものところは素通りで、もっと大変な世界というか、暗いところ、底が抜けてしまうみたいな方もいっぱいいらっしゃると思います。

ただ、この子たちに余裕があればたくさんのチャレンジと諦めを繰り返して選択肢を広げながら絞れるのですけれども、最近本当に余裕がない。家庭の余裕や支えの余裕がないのと、ここで言うのもなんですが、行政側の事業の成果指標にも余裕がない。端的に言うと、とにかく短期で雇用保険被験者となり得る雇用契約を結んでください。そうでない条件で働けるようになった方はカウントゼロなのです。変な話、起業してもゼロなので、一定条件以上の雇用に就いたことが初めて１という成果になり、そこが翌年の成果達成度になっていますので、本当に諦めていくような練習もチャレンジすることも十分にできないのが今の環境かと思います。

加えて、資格の壁で一番大きいのは、一つは高卒が当たり前の前提となっていることが多いので、中卒の子たちが公認資格をまず取らないといけない世界が結構あるという意味では、冒頭、野口委員らと少年院へ行っていると話しましたが、ほぼ中卒です。高校中退か中卒の子が多いので、現実、中卒からという資格では入れない世界やチャレンジできな

い資格があります。

直接的な回答にはなっていないのですけれども。

【林委員】　いいえ、参考になりました。ありがとうございました。

【山﨑委員】　いろいろ興味深いお話、どうもありがとうございました。私、昨年まで東京都の発達障害者支援センターのセンター長をしておりまして、私どもの相談で、それまで引きこもっていたがこれからどうしたらよいか、どこか行けるところはないかといった趣旨の相談があります。居場所、さらに社会につながるという意味合いで育て上げネットをご紹介いたしておりました。育て上げネットは東京都若者社会参加応援事業を受託していらっしゃいますので。そういうこともあって御紹介しておりました。

つながったその先での支援の終わりとして「就労支援」等があると思うのですが、一人の方に平均してどのぐらいの期間、関わっているのか。どういう状態になると育て上げネットを卒業するのか。また先程つながらなかった方たちの社会参加を後押ししていくというお話でしたが、その辺をどのようにお考えになっていらっしゃるのかお伺いしたいと思って質問させていただきました。よろしくお願いします。

【工藤理事長】　御質問、ありがとうございます。

もちろん一概には言えない部分はあるのですけれども、一緒に関わって１年間もしくは１年半で何らかの「働く」につながることが難しいと判断した場合は、うちで活動を一緒にすることはその人の時間とお金を無駄にする可能性が高いという意味で、本人ともちろん話合いの上ですが、うちのサービスでは良い場所に適切な期間内に行くことはできないのではないだろうかということはお伝えするのが一定の基準になっています。ただ、元々３年かかったり、御本人も御家族も３年かかっていいのだという場合にそれでいいかという話はあるのですけれども、１年なり２年というのはその人の人生にとってとても長い時間です。１年か１年半で仕事に就くことを前提として応援する団体ですので、何らかの仕事に就くことが難しいということであれば、スタートの段階で御一緒することはなく、ほかの場所にしっかりとつないでいく、もしくは、途中でそういう話を御本人に差し上げるのが一定の基準ラインかなと考えています。

【山﨑委員】　ありがとうございます。

もう１点よろしいでしょうか。「就労支援」というところで、就労にはいろいろな形態があり、何も就職することだけではない。生き方にはいろいろあるというお話でしたが、大いに共感できるところです。その点と社会の主潮とのギャップがあるように思えます。

利用なさっている方にはそこをどういうふうにお話ししているのでしょうか。そこは大きな問題で、まだまだ世の中では、「働くこと」にはいろいろな形態があるとは理解されにくい現状があると思います。その辺はどのようになさっているのでしょうか。

【工藤理事長】　全部ではないですけれども、まず短期的なものと長期的なものとキャリア上整理して分けていかなければいけないというのがあります。働いて安定した収入を得ていくのには、いつぐらいから最低限そこに行くかという話と、今正にできることやチャレンジしたいことは何なのか。何よりも社会的な安定より、本人の安定がない働き方は社会的な安定にいくことはできませんので、その辺の時間軸と状況をもってキャリアのお話をすることが一つあるかと思います。

社会的な認知で言うと、第一の壁は、ご家族の価値観の壁があります。一例を申し上げますと、毎月、仕入れて売るせどりで６万円を稼いでいた方に対するお父さんのプレッシャーが半端なかったのですけれども、コンビニで６万円稼ぐと許すのです。この違いが私には全く分からなくて、職員とともに、違法でない形で６万円を稼ぐことに、コンビニエンスストアはオーケーで、せどり、インターネットを使ったのは駄目だという感覚が分かりませんという話を端的に申し上げると、実は回答もあまりない。安定、安定などという話はするのですけれども、例えばコンビニエンスストアでアルバイトしていることは安定なのですかみたいな話をすると、親御さんも戸惑いがそこにはあって、回答はなくて、お子さんのことは心配している。なので、せどりで６万円も認めましょうみたいなところから話をすると、実は本人もせどりで６万円でずっといけると思っていないみたいな話になったりしますので、当然ですけれども、御家族には若者側に立った視点でお話はします。

ただ、私たち自身としては、そもそも正社員が一番安定している、フリーランスが不安定だという社会環境自体に問題があると思っていますので、本来であれば、個人を支えるに当たっては、その人が安定する働き方を応援しつつ、どのような働き方であっても社会的な安定はひとしく国民に提示されなければいけないという、構造のほうへの働きかけも必要だと思っています。ただ、後者に関しては知見がまだたまり切っていない部分がありますので、今後もう少し勉強して、様々な働き方が認められ、安定できるためにはどういう制度や政策がいいか。正社員を頂点とした働き方を駆け上がらせるだけが「就労支援」のモデルでないということはうたっていきたいと思っています。

取組としては不備が多くて大変申し訳ないですけれども、回答としてはこういう形でお願いできればと思います。

【山﨑委員】　　どうもありがとうございました。

【笹井会長】　　今のことに関連してですが、要するに、お金がついてくるかついてこないか。先ほど広石委員の御指摘もありましたけれども、お金がついてくる、ついてこないよりも、自分が社会的な価値をつくること。つまり、ボランティアでも何でもいいのだけれども、「働く」ということがとても大事ですよということがすごく貴重な御指摘だと私も思ったのですが、それが社会を運営するというか、社会を見てみると、どうしてもそれを制度化というか、システム化する方向になるわけですね。システム化から外れたボランタリーな活動についてはお金がついてこないところがあって、例えば先ほどのいろいろなインターネットを使った商売などの話もそうですけれども、システムの広がりや幅をどんどん広げていくような働きかけがむしろ公的セクターに求められていて、こういうふうに働いたらこうです。それをオーソライズしてあげるといいましょうかね。そういったことが公的セクターに求められていて、システムから入っていなくて、お金がついてこない労働というものを取り込んでいくといいましょうか、膨らませていく方向がとても大事だと思うのですけれども、この辺についてはどういうふうにお考えでしょうか。

【工藤理事長】　　今新しいチャレンジをしていまして、そもそも仕事をしてお金をもらうことが当たり前というのは何でかというところから入ります。つまり、今日、委員の方々の前で「就労支援」というプレゼンをさせていただいているのですけれども、私たちが元々限界だと思っているのは、余裕がない人に支援できていないということです。「就労支援」というのは、今日明日ハローワークで仕事をあっせんできるわけではないです。ハローワークだって、失業保険がない方に対して、今から働いても１か月後の給料しか入らないところに関して、結局、その時間軸の中で仕事紹介を受けたり、「就労支援」を受ける人はやはり余裕がある人になってしまう。先ほど言った１年かけてというのは、１年かけられる人にしか支援ができないという意味です。

一つは、生活保護などを受けている方々の自治体とタイアップしてうちの事業に来ていただくことはお金がかからないように、生活保護費が削られないような取組はしているのですけれども、今少しチャレンジしていますのが、分かりやすく言うと、職業訓練を受けている間こちらが雇用してお金を払う。雇用されてお給料を頂きながらトレーニングを受けて、その結果就職する。Ｃａｓｈ　ｆｏｒ　ｗｏｒｋという震災･災害支援の手法をコロナ禍に当てはめまして今チャレンジを幾つかの団体としています。

そうなったときに大変重要だと思いましたのが、余裕ない方々から参加したい。つまり、

稼がないといけないからトレーニングを受けられないではなく、トレーニングを受けながら一定の収入が得られるのであれば、これまで受けられなかったトレーニングや新しい産業への転換を図りたいという方が、シングルマザーの方や若い方、ルーツが外国にある方、その他様々な働きづらさがこのコロナ禍で特に顕在化した方々から参加したいのだと受けて、それは決してお金が欲しいからではなく、産業移転や新たな安定雇用にたどり着くための船にお金をもらいながら乗れることに対して、やはりこれだというところがあったというふうに私は感じています。

そういう意味では、直接的に会長の御質問に回答しているわけではないのですけれども、どれだけイメージを膨らませても、最終的に就職支援と「就労支援」が余力のある人にのみ届くものだというふうに考えた場合、都民の理解が得られるか分かりませんが、生活を支えながら次の就労にいざなう。生活保護でない形の雇用型のセーフティーネットというのはあったほうがいいと思います。家族に頼れない１０代の方に関して言うと、むしろそれがないとかなり大変な状態になってから出会うことになるという意味では、本当に高校を中退したり出たばかりの子供たちがいわゆる非正規のアルバイトから入るぐらいであれば、非正規のアルバイトと同じだけお給料をもらえる代わりに技術を身に付ける余裕や時間を私は提供してあげたいと思います。

そういう意味で、公的機関の役割かどうかというよりは、今の中で幅を広げても、結局、支えられる人はある一定層に限られてしまうかなというところが今の問題意識にあります。

【笹井会長】　よく分かりました。ありがとうございました。

どうぞほかの方もおっしゃってください。野口委員、お名前が出ていますけれども、いかがですか。

【野口委員】　ありがとうございます。工藤さんにはいつも日頃から大変お世話になっております。今日もありがとうございました。皆さんからもお話にありましたとおり、改めて御活動についてお聞きして、「働く」というところに対する新しい価値観を私自身改めて学ばせていただきました。

１点、やはりアップデートしていかなければならないと思ったのは、支援者側が変わっていくことがとても重要だと思っています。これは是非お聞きしたいのですけれども、工藤さんのお話を聞いていると、実際にいろいろな新しい稼ぎ方というか、働き方といったもの自体を支援者の皆さんが御自身でチャレンジしてみて、それをもって若者たちに支援していくみたいなことをされているというふうに以前もお聞きしたことがあったのですが、

その支援者の皆さんがそういった新しい知識やスキルを身に付けていったり、そこに対して自信を持っていくために工夫されていることなどがあったら是非教えてください。

【工藤理事長】　　ありがとうございます。

理想的には、支援者、援助職、伴走する立場がいろいろなことを学びながら子供たちや若者にというふうに思っていたのですけれども、この１年間ぐらいやってみまして、若い子のほうが支援者に教えているような状態がものすごく良い。むしろリモートワークになったことで何となく縦の関係が良い意味で見えづらくなって、援助職がこういうことをやってみましょうと教えようとしているところに、チャットからものすごい経験者入ってきたり、私はこれをやっていますと、逆にネットから引っ張ってきたりしています。援助職が混乱しているところを横から見ていて、すごく痛快です。そういう意味で、援助職が学んで教えるのだと思っていたのですけれども、リスクがあることだけはきちんと伝えながらも、やっている子たちがやっていない子たちに教えるようなコーディネーションはすごく良いなと思っています。対面だと教える子もプレッシャーに負けてしまいそうなのですけれども、リモートワークは正に自分がオフでもできてしまうので、やっている子がやっていない子たちに教えながら、あるラインを越えてはいけないところだけはしっかり大人が見ているぐらいのほうがいいかなと、この半年ぐらいずっと見て思っています。

援助職が、などと言っていますが、子供の技術習得はすごく速いです。

【野口委員】　　そういう観点がすごく重要だなと思って、どうしても自分が年上だと教える、自分が教えていなければならないというふうになってしまうと思うのですけれども、そうではなくて、むしろ子供、若者に教えてもらうのだ。それでも大丈夫なのだと支援者が思えること自体もすごく重要だなと思って、公的機関で支援をしていくに当たってもすごく重要な観点だと思いました。

あと、分からないものに対する不安や怖さみたいなのはあると思うのですね。それこそネットで何か悪いことをするのではないかといったところも、公的機関も育て上げネットさんみたいなところからもっと学んでいけるといいのかなと思いました。ありがとうございました。

【工藤理事長】　　縦関係の援助職であるがゆえに全部分かっていないといけないというマインドを外すのが今一番課題かなと。悪いことだけではないと思うのですけれども、その責任感が縦構造を壊せないまま、でも、きちんと教えられないみたいなのを生んでしまうので、野口委員がおっしゃったようなことは、援助職が自信を失わないように、「役割

が違うときがあるよね」ということで少しずつ進めていきたいと思います。

【青山委員】　　質問をさせていただく前に、今のやり取りを聞いていて、援助職が縦の関係をいかに崩すかというところは、ある意味とても社会教育的だなという感覚も持ちました。社会教育の領域でこれまで大事にされてきたことがうまく生かせると良いのかなと思ったところです。

お聞きしたかったのは、ＫＰＩに関するところで週３０時間という条件が縛りになっていて援助の枠が狭くなるというお話があったのですけれども、単純に時間数を減らせばいいというお話なのか。あるいは、もっと広く、いわゆる受託のプロセスの中では行政による評価が欠かせないものだとしても、事業者もそうした評価に振り回されがちな状況もよくお聞きしますし、どういったＫＰＩや評価の枠組みをつくっていくと、事業者にも行政にもよい形になるのか。評価に関してお感じになっているところがあれば教えていただけないでしょうか。

【工藤理事長】　　この辺は非常に難しいと思います。特に評価は、本当に様々な評価手法も開発されながら、何と言っていいか私も分からないのですけれども、自分たちの事業の立脚点からすると、まずＫＰＩを設計すること自体が良い悪いということはあまり思っていないというのがあります。それは、ＫＰＩがあってもなくても頑張るべきだとは思っているのですが、あまり狭いＫＰＩを求められたときに、対象者は幅広く、できれば、大変な人という附帯事項を付けながら、３０時間以上で働ける人という、どちらかにしてくれというのはあります。どちらでもいいのだけれども、どちらかにしてくれると、その事業を自分たちがやるかどうかの判断ができるのです。いろいろな人、大変な方にも手を差し伸べられるのだということでやりたい事業に結構高いＫＰＩ、就業ＫＰＩが付いていると、やはりこれはやるべきではないのではないかと思いつつ、逆にそういう事業を就職支援が得意なところが受けたのを見ていると、就職できるところだけを集めてきて、それ以外が排除されているみたいなことがどうしても構造上起こってしまうので、ここは、どうしたらいいというよりは、はっきりしたほうがいいかなというのが一つあります。

もう一つは、これも評価ではないのですけれども、私自身の考え方としては、ある特定の団体に委託を出すよりは、もし民間の活動を使うのであれば、利用対象層にチケットを渡して、自分が行きたい場所にそのチケットを持っていって支援を受ける。その代わり適切な支援がなされないところに関してはそのチケットを使えないようにする。組織によって得意、不得意があります。資格を取るところを応援するのが得意な組織もあれば、元気

にする、自信を持たせるところことが得意な組織もあると思います。委託・受託の関係は基本的に１者前提であると、どうしてもそこの受託した会社の得意なところに事業が偏在していきますので、折衷案としてはジョイントベンチャー方式で、例えば若者に対する「就労支援」をするような事業であれば、株式資本の連結がない５団体以上しか申請できない。不登校の得意なＮＰＯと就職あっせんをしている人材企業等で、資本提携のない団体３者、４者ぐらいでないとそもそも応募できないみたいな形を公契約の中に実現できると、１者の得意、不得意な領域に受益者が左右されなくていいのかなと思うことはあります。

その意味では、青山委員の言った評価というところではないのですけれども、出されたＫＰＩとうたわれている対象者の隔たりがすごく大きいので、そこは行政の方がぎりぎり支援できる対象者を広げてくださっているのですが、ＫＰＩ側がどうしても動かないところが結果としてのやりづらさを生んでいるのではないかというところは感じます。

【広石委員】　工藤さんのお話を聞いていて、移行期間みたいなものを支援されているのだなと感じて、トランジションというか、ある意味でメインストリームのところから外れてしまった、うまくそこへ乗っかれなかった人がいて、そうした人たちは次のステージへ行くためには１回落ち込んで、もう一回時間をかけて次のところに行く。そのためには、自分が安定しなければ、その先が安定しないじゃないかというお話ではないかと考えていました。

そういう中で御質問ですけれども、青少年教育振興に期待する観点のところで、安全に「稼ぐ」を手にできる職場提供や、逃げ場としてや駆け込み寺的な社会環境がすごく必要だとおっしゃっていて、それもすごく共感を感じるのですが、そうした際の事業の主体は誰がいいか。例えば今のような一つのジョイントベンチャー的なＮＰＯと企業が組んで行うということはあると思います。あるいは行政、東京都がやったほうがいいのか。それとも市町村などがやったほうがいいのか。その予算はどこからついて、どこが主体としてそういった機能を担うといいとお考えか教えていただきたいと思いました。

【工藤理事長】　青少年に関して言いますと、私は都なり市町村の行政が前面に出たほうがいいと思っています。それは信頼度が全く違うという意味で、だまされない、安全であることの担保は、今、公的な機関ぐらいしかできないように思っています。ハードウエアはどうしても建築屋さんなどがいないとお話にならないと思うのですけれども、問題はソフト面で、仕様書の遵守に対して出てきた予算で、それ以外の部分を勝手に寄附や稼い

だりしてやっていいというところが今のところないと思っています。

３年前にある区の子供たちの支援の受託をしたときに、学習のためのお金しか出ませんと言われたのですが、夏のキャンプなどをこちらが寄附して連れていっていいのかと話をしたら、いいと言われたのですね。いわゆる委託は学習支援だけだったのですけれども、そこで出会った子供たちに対してそれ以外のサービスを寄附でやることに了解がでたので、実質的には公的予算と民間の予算を合わせて子供たちに機会提供できたのです。別の某市では、委託事業内で知り得た個人情報に対して、その受託団体が集めた寄附でサービスをインすることは個人情報上駄目だということでできなくて、同じ事業をやっているのですけれども、子供の活動範囲が倍ぐらい違ったことがありました。

その意味では、予算をどこから持ってくるかというところは、庁内調整の面と、子供のためにお金を払ってもいいと思っている寄附者や企業からその事業に対して集めて使ってはなぜいけないのかというところがルールはあるのでしょうけれど、整理されていない気がしています。そういう意味では、ジョイントベンチャーで、かつ、公的な予算、いわゆる一般的に使える範囲はルールを遵守しながらも、それ以外にやりたいところは一定の節度を持って調達してきていいような形で、両方セットでやれるほうが現実的には子供たちにとっての機会は大きくなるのではないかと考えています。

【広石委員】　すごくよく分かります。一番のベースの信用があって、絶対この問題を解決したいというためのベースとなる事業がある。ただ、さっきのお金を少し動かしたりする部分は一定の自由度がないといけないのでという意味で、そういう制度設計みたいなこと自体が必要かなと思いました。ありがとうございました。すごくヒントになりました。

【笹井会長】　ほかにいかがでしょうか。事務局はいかがですか。

【主任社会教育主事】　感想だけ述べさせていただきます。

最後の広石委員との議論は、我々が今後、都のほうでも事業を考えていくとき、公的に出せる経費というのは限界が当然出てくるのです。そこを民間の意志やいろいろな寄附でうまくミクスチャーできるというのは、学校教育制度ががっちりしたところだとやりにくい部分だとは思うのです。青少年教育、社会教育という分野の中でその辺をどう捉えられるかということは私なりに関心を持っていたところなので、すごく良い議論をしていただけたと思いました。

もう１点は、この間、工藤さんの図にも援用していただきましたけれども、ターゲット・アプローチとユニバーサル・アプローチと区分しながら問題を設定していって、どち

らかというとユニバーサルなアプローチに光が当たっていないというところがこれまでの議論の主軸でした。今回はあえてターゲット型のほうに重きを置いている団体からユニバーサルの問題をどう見るかということを報告してもらえるといいかなと思っていたのです。今日聞いて思ったのは、実はターゲット型アプローチでやられていたいろいろな成果というのは、一般の青少年にも十二分に生かせる視点があって、そこはボーダーレスな部分だなと痛感したというのが今日の感想です。

ありがとうございました。

【笹井会長】　　ありがとうございました。

そろそろ時間になりました。非常に実のある意見交換ができたのではないかと思っています。工藤さんのほうから、全体を通して何か御感想などありましたら頂ければありがたいです。

【工藤理事長】　　ありがとうございます。

審議会の資料なども拝見して、東京都に限らず、今どんどん施設、ハードが空いてきていて、空き家であったり、リモート化による不動産からの撤退であったりという一方で、ハード、事務所がなくて活動が結構停滞している、ＮＰＯに限らず、企業などがある。また、そこに対して、ハードの施設に来る子はいいけれども、来れなかった子たちは、このコロナのおかげで、どこにいてもよくなったときに、青少年に施設に来てもらうための努力から、インターネットも含めて届けていく発信基地みたいなものがきっとハードの一部に求められてくる。子供たちが発信することが当たり前になってきているので、子供たちが安全に発信できるような基地としてのハードの役割がこれから先に生まれてくるかなというふうには思っています。

特に今東京都が持たれているハード、施設は宿泊棟がある。家族からも瞬間的に逃げなければいけないとか、悪い世界にからめ捕られそうな瞬間の子供たちなどをかくまうには限界がありますので、一時的に衣食住を提供できる場は必要です。しかも、かくまうためのＮＰＯではなくて、健全な青少年施設という立てつけで、実質的にはかくまうことができる。本人の自尊心を削らないようなことに関しても、空いてくるハードをできる限り子供たちのために使いたいと思っています。

日本の場合、特に子供や青少年のためだったらという一つのビジョンに集いやすいところだと思いますが、その根底をなすのは信頼です。公的な機関の信頼度というのは、一般からすると天と地ぐらい差がありますので、皆さんの信頼の上に施設、ハードがあって、

この上に私たちのような活動がうまく乗っていけるような場所をモデルとして東京都からつくっていただきたいというふうに感じています。

東京都民、生まれも育ちも東京都なので、そうしたモデルを東京からつくっていきたいなと個人的にも考えていますので、是非、委員の皆さん、よろしくお願いします。

【笹井会長】　　ありがとうございました。

今日は、育て上げネットの理事長の工藤さんからいろいろなお話を聞くことができました。非常に示唆に富む話で、現場の話、それから支援の在り方等々の話、幅広い話を聞くことができました。本当にどうもありがとうございました。

それでは、次第３のその他に関しまして事務局のほうからお願いしたいと思います。

【生涯学習課長】　　工藤様、ありがとうございました。

次回第１１回の実施時期につきましては、新年度に開催をさせていただく方向で検討しております。具体的な日程につきましては、後日改めて御調整させていただきますので、御協力のほどよろしくお願いいたします。

以上です。

【笹井会長】　　以上をもちまして、本日の第１０回目の審議会を終わりにさせていただきます。皆さん、御協力、ありがとうございました。

閉会：午後８時０１分